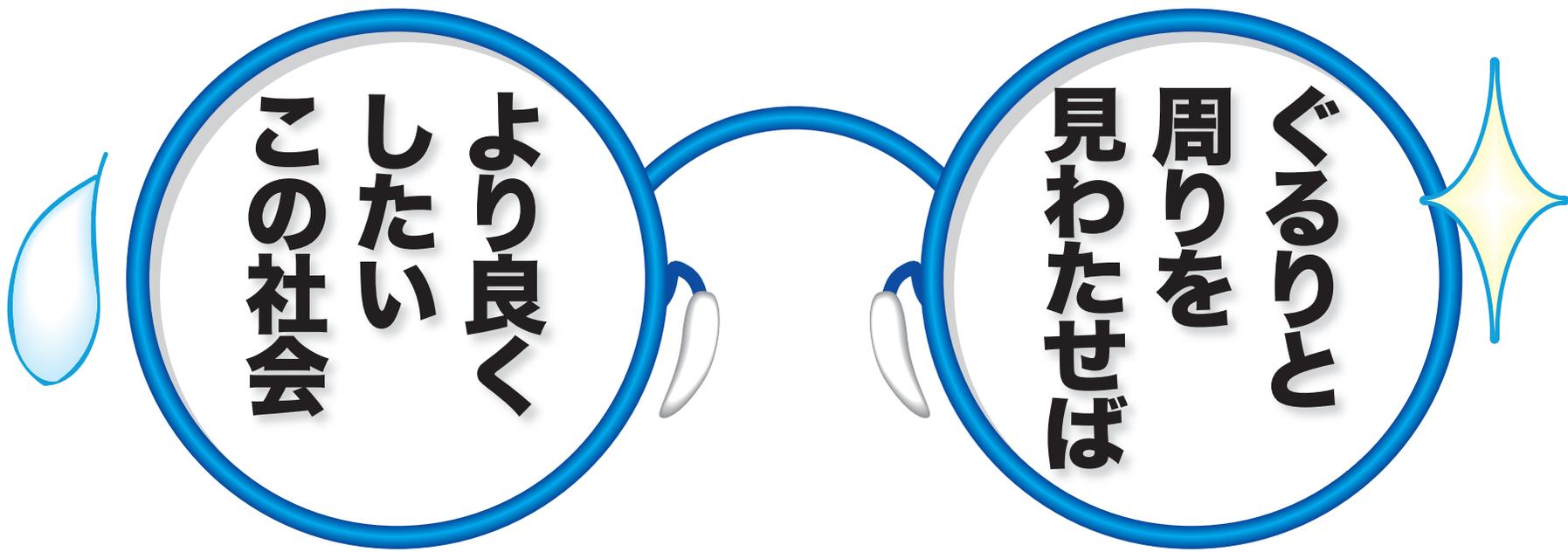


4 みんなとつながって

- 
- (1) 法やきまりを守って
 - (2) 公正、公平な態度で
 - (3) 自分の役割を自覚して
 - (4) 公共のために役立つことを
 - (5) 家族の幸せを求めて
 - (6) より良い校風を求めて
 - (7) 郷土や国を愛する心を
 - (8) 世界の人々とつながって

(1) 法やきまりを守って

考えよう、これからの社会と私たち



社会をつくるのは私たち自身、社会を守っていくのも私たち自身。住んでいて良かったと思える社会をつくっていくには、どうすればよいでしょうか。



「ながら運転」、思わぬ大事故にも……



川や海や湖が……



きちんと分けて……



ここはキャンパスじゃない



歩道がいつの間にか……



電車の中だけ……



どっどこかに空き缶が……

●きまりやマナーを守らないとどのようなことになるのでしょうか。



きまりやマナーを守ることは、一人一人が心がけるべきことです。
ところが、自分勝手な行動があちこちに見られます。どうして、きまりやマナーを守ることができないのでしょうか。

●きまりやマナーを守ることが大切なのはなぜでしょうか。

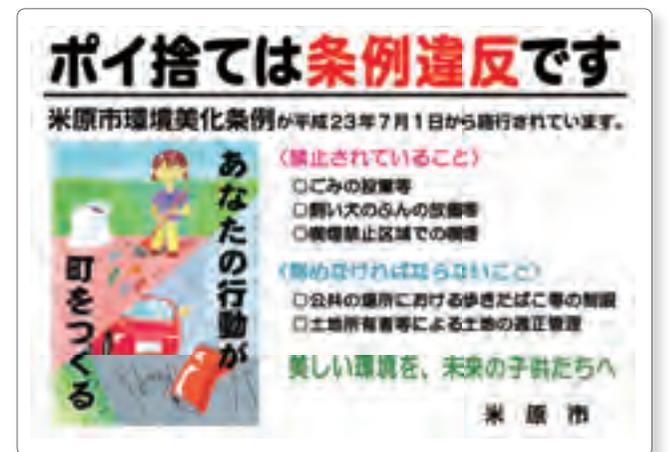
6年

5年

話し合ってみよう

社会のきまりやマナーを守ること

町の中では、いろいろなところできまりやマナーに関する掲示物を見ることがあります。こうした掲示物が多い理由を考えてみましょう。



権利とは、義務とは何だろう

私たちは、一人一人が権利をもち、義務を果たしながら社会の中で共に生活しています。

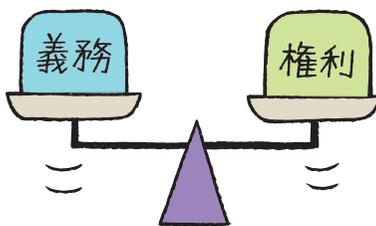
権利

ある物事を、自分の意思によって自由に行ったり、他人に要求したりすることのできる資格や能力。

義務

人がそれぞれの立場に応じてしなければならないことやしてはならないこと。

だれかが一方的に自分の権利ばかりを主張して義務を果たさなかったり、一方的に義務だけをおし付けられたりするようなことがあったら、どうなるでしょうか。私たちの生活や社会はうまくいくでしょうか。



私たちはだれでもより良い社会に生きる権利がある。より良い社会をつくる義務がある。

● 権利や義務について、学んだことや考えたことをまとめてみましょう。

日本国憲法が定める国民の権利と義務

日本国憲法では、人が人として当然もっている権利で、生まれてから死ぬまで、すべての国民に保障されている権利を「基本的人権」として尊重することを定めています。

また、同時に、国民が果たさなければならない義務についても定めています。

権利 (例)

教育を受ける権利
政治に参加する権利(参政権)
思想や学問の自由
健康で文化的な生活を営む権利(生存権)

義務

子供に教育を受けさせる義務
仕事について働く義務
税金を納める義務



衆議院議場
衆議院の本会議が開かれる
場所。国会議事堂の中にあ
る。

「これが衆議院議場なのか。」

健一は、テレビで見た衆議院議場を
目の当たりにして圧倒されました。

「ここで、たくさんの法律が決められ
ます。」

案内の人が説明してくれました。

（ここで国の法律を決める。ぼくらは
校庭遊びのきまりも守れないの
に……。）

発端は、明と鉄男がゲームの販売日
に、校庭遊びのきまりを破ったことで
した。高学年が遊べる時間は、低学年、
中学年の後だったのに、ゲームの販売
時刻までに帰りがかった明と鉄男は、
低学年の時間にサッカーをした後、

ボールを出しっ放しにして帰ったのです。

翌朝、健一が、明と鉄男に言いました。

「自分たちで決めたままりを破るなんて、駄目だよ。」

すると、鉄男が冷やかすように言いました。

「はいはい、健一君の言う通り。でもさ、自分の遊ぶ権利は主張しなくちゃね。」

（それって、権利って言うのかなあ。）

健一が迷っていると、すかさず、

「そうそう、ぼくの遊ぶ権利や買う権利をうばわないでほしいね。」

と、明が言うのでした。

悪いことに、次の日には、他のクラスからも勝手な行動をする人が出ました。

「今日は習い事があるから低・中学年の時間に遊ぼう。」とか、「楽しみなテレビ番組に合わせ
て時間を決めよう。」などの理由できまりを破るようになったのです。

そして、とうとう鉄男のけたたボールが一年生に当たってしまい、放課後の校庭遊びは休止
になってしまったのでした。

この翌週に、社会科見学で国会議事堂を見学することになったのです。

「さて、ここが参議院議場になります。わが国の国会では、大切な取り決めをより慎重に行う
ことができるように、先ほどの衆議院と参議院の二つの議院から成り立っています。」

案内の人の話を聞きながら、健一たちは改めてきまりについて考えてみました。

(国会議員の人たちは、大事なことを衆議院、参議院の二か所で順番によく話し合って決めている。議員の人たちは、様々なことを調べ、考えて、国のきまりを作っているんだ。)

「校庭遊びのきまりだって、確か学級で話し合って、代表委員会に提出して決まったんだよね。」

「そうだよ、ぼくは代表委員として校庭遊びのことを提案したんだ。全学年で校庭を使うには、せまくて危ないので、高学年が後の時間帯にしたらどうかって。スケールはちがうけど、自分たちもみんなが安全で楽しく過ごせるようになって、学校全体のことを考えて……。」

健一は、このきまりを提案したきっかけをふり返ります。

(ぼくたちは何か大切なことを忘れていたのではないか。)

健一の心に疑問がわいてきました。

しばらくして、鉄男がつぶやきました。

「遊びたいときに遊んで得した気分だったけど、結局は一年生が安全に遊ぶ権利をうばってしまった。」

それまでだまってじっと聞いていた明も、

「時間を守るという義務を果たさなかったこと、今は後悔している。」
と、つぶやきました。

「きまりを軽く考えて、自分だけはいいかななんて……勝手だった。」

鉄男はしきりに反省しています。

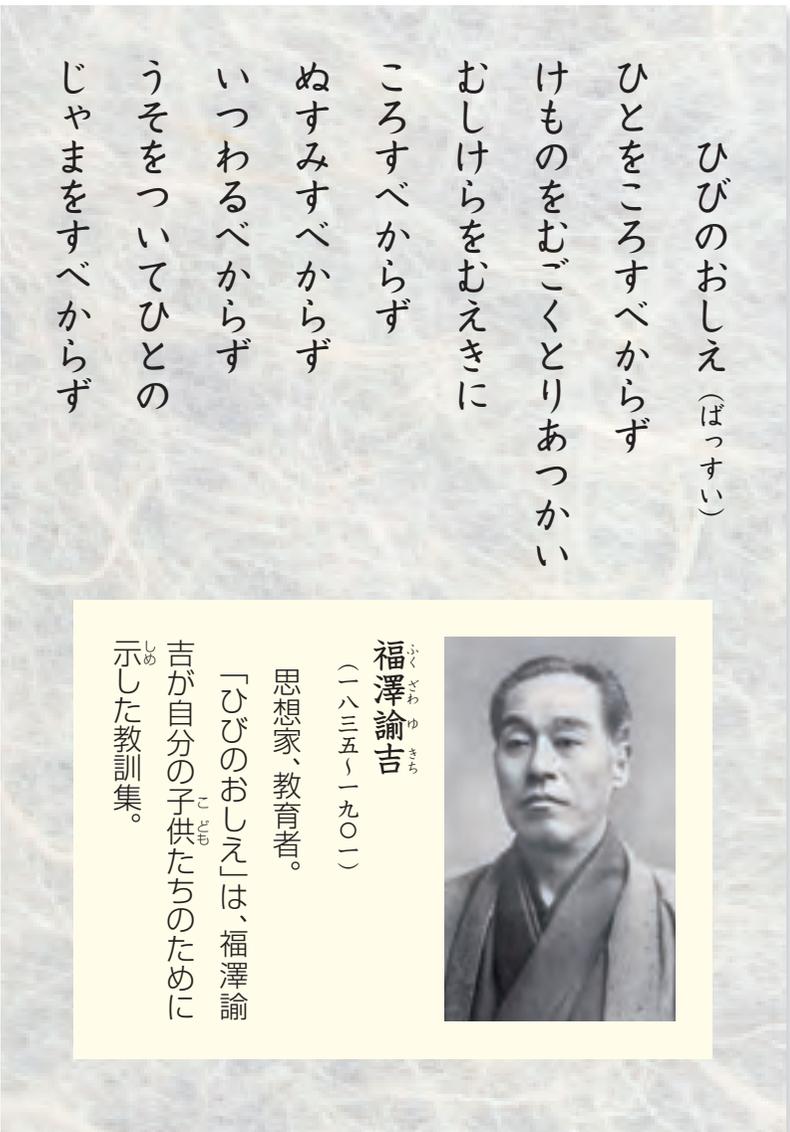
「きまりって何のためにあるのかな。」

健一はもう一度みんなできまりについて話し合ってみたいと思いました。

国会議事堂見学から帰った翌日、学級で改めて「きまりは何のためにあるのか」を話し合うことになりました。



社会で生きる一人として 守らなくてはならない人



ひびのおしえ（ばっすい）
 ひとをころすべからず
 けものをむごくとりあつかい
 むしけらをむえきに
 ころすべからず
 ぬすみすべからず
 いつわるべからず
 うそをついてひとの
 じやまをすべからず

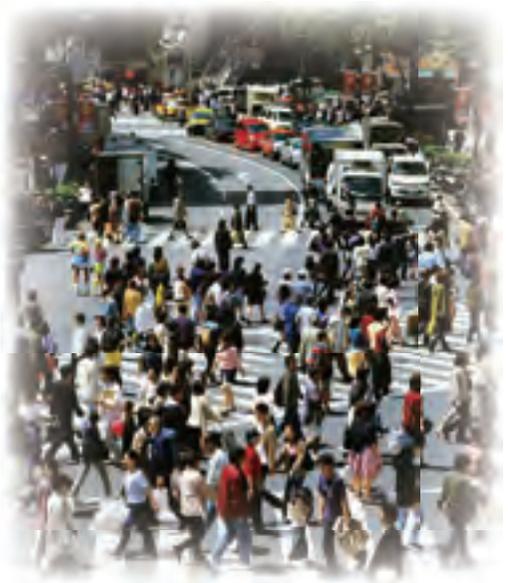


福澤諭吉
 （一八三五―一九〇一）
 思想家、教育者。
 「ひびのおしえ」は、福澤諭吉が自分の子供たちのために示した教訓集。

人が人として社会の中で生きていく上で、守らなければならない法やきまりがあります。
 集団や社会は、様々な立場でいろいろな考え方をもった一人一人が集まってできています。
 だからこそ、「おたがいに法やきまりを守る」、「してはならないことはしない」などのことが大切なのです。

話し合ってみよう 人として「してはならない」人

みんなが人として守らなければならないことを考えてみましょう。



人として守るべきこととして、他にどのようなものがありますか。
 また、なぜこれらを守らなければならないのか、話し合ってみましょう。

こんな人はしません

- 暴力をふるってはいけません
- 弱い者いじめをしてはいけません
- 人の物をとってはいけません
- ひきょうなことをしてはいけません
- 人を傷つけるうそをついてはいけません

(2) 公正、公平な態度で

みんな同じ かけがえのない一人の人間

男性も女性も
子供もお年寄りも
世界中の
だれもが
みんな同じ
かけがえのない
一人の人間。



ふと知らないうちに
だれかの心を
傷つけてしまっていることがある。
知らず知らずのうちに
かたよった見方や考え方をしてしまう。
そんなことはないだろうか。



この世の中で
一番大きな苦しみは
一人ぼっちで
だれからも必要とされず
愛されていない人々の
苦しみです

マザー・テレサ
(一九一〇～一九九七)

マザー・テレサは、ヨーロッパの裕福な家庭に生まれながらも、生涯をインドの人たちのためにささげた女性です。
十八歳で故郷をはなれてインドへわたると、あこがれていた修道女としての生活を始めました。そこで貧しさに苦しむ人々の姿を目の当たりにしたテレサは、やがて、「すべてを捨て、最も貧しい人々のために働こう」と決意します。修道院を出て貧民街に移り住み、孤児や病気の人々のために救済活動を始めたのです。

一九五〇年、貧しい人に奉仕する「神の愛の宣教師会」を設立し、そのころから、マザー・テレサと呼ばれるようになります。そして、行きだおれの人々や重症の人々を受け入れるための施設や、孤児を救済するための施設を開設し、貧しい人々や、当時のインドの厳しい階級差別に苦しむ人々に献身的につくしました。

一九七九年に「高貴な人間愛の象徴」としてノーベル平和賞を受賞。受賞にあたり「私は受賞者にあたいしませんが、貧しい人々に代わって、この名誉ある賞を頂きます。」とコメントしました。

なぜ、かたよった見方や接し方をしてしまうのだろうか

あなたの周りに、つらい思いをしている人はいないだろうか。

人の心を傷つけたり、傷ついている人を見て見ぬふりをしたりしていないだろうか。

●このようなとき、あなたならどうしますか。

そうじの時間です。ごみ箱にたまったごみを、

最後に収集場所に捨てに行くことになりました。

当番だったAさんがごみ箱を持って行こうと

すると、Bさんが

「Aは行かなくていいよ。」

と言いました。

そして、Cさんに向かって、

「C、お前が行けよ。」

と言って、Cさんにごみ箱をおし付けました。

あなたがAさんだったら

あなたがCさんだったら

あなたはこのメッセージを読んで、どのようなことを感じますか。

いじめている君へ

この文章を読もうとしている君は、本当の「いじめっこ」ではありません。だれかをいじめ続けても何も感じない本当の「いじめっこ」は、とても鈍感で、これを読んだり、改めていじめのことを考えたりなど、するはずがありません。

実は、いじめる側に立つ人たちのほとんどは、君のような人たちです。いじめで、友達が深く傷つくことに気が付いているけれど、鈍感なふりをして生きている人たちです。

よく自身も、中学のとき、いじめられる側にもいじめる側にもいたことがあります。だれをいじめるかをリーダー格が決め、無視をする。持ち物をかくす。やめれば、今度は自分がいじめられますから、みんなの機嫌をとって、やめようと言えませんでした。いじめられた経験があるからです。いじめられたのは個性のある人たちばかりです。静かであっても、どこか秘めたパワーを感じさせる人もいました。もし友達になれていたら、その交流を通じて、自分が知らない、別の世界にふれていただいでしょう。

今は立派な仕事をして、それぞれの分野でかがやいている人がたくさんいます。しかし、いじめられた側は、いじめた側を、よく観察していたので、大人になっても決して忘れてはいません。

いじめる側といじめられる側の真ん中辺りにいる君たちには、大きな可能性があります。もし君たちのうちの何人かが強い気持ちをもつことができれば、いじめを食い止める大きな力になれる。そうして得られた友達は、きっと君の世界をもっと大きく広げてくれるはずです。

千住明
(作曲家)

四月二十八日（くもり） ベトナムから来たリャンちゃんは、今日もさみしそうにしていた。日本語があまり話せないので声をかけてあげたくても、なかなかできない。私ももう六年生のだから、しっかりしなくてはと思う。

四月三十日（晴れ） 父が久しぶりに「明日、ホームに行く。」と言う。

父は何かうれしいこと、つらいことがあると、ホームに行く。ホームとは、神奈川県大磯町のエリザベス・サンダース・ホームのことだけど、父は二歳のとき、そこに預けられ、青年になるまでそこで育ったのだ。

父の父（私のおじいさん）は、アメリカ人で、私の知らない人だ。

父が生まれたのは戦争の後で、おじいさんは、日本に来ていたアメリカの軍人だった。父の母（私のおばあさん）は日本人で、父が持っている古ぼけた写真を見ると、若くてきれいな人だ。二人は心から愛し合っていたのに、ちがう国の人同士の結婚は、いろいろと難しかったらしく、とうとう別れることになってしまった。

それから、おばあさんは病気になって、父を育てられなくなり、父をホームに預けると、すぐになくなってしまった。だから、父のふるさとは、大磯のエリザベス・サンダース・ホームで、

父の新しい母は、このホームを作られた澤田美喜先生なのだ。

五月一日（晴れ） 私は、父と連れ立って歩くのが好き。今日もつきつきしている。

ホームに着くとすぐ澤田美喜記念館に行った。父はいつも、澤田先生の写真をじっと見つめて話しかける。父は、先生のことを今でも「ママちやま」と、呼ぶ。

澤田先生のふっくらとした顔、やさしそうなまなざしに向き合っていると、私の心まで、ぼっと明るくなる。

大きな戦争の後で日本が混乱していたとき、父のように、外国の人と結婚ができずに生まれてきて、両親とはなればなれになる子供たちがたくさんいた。

若いころ、長く海外で生活されていた澤田先生は、そんな子供たちを見ると、自分の子供のようにいとおしく思えてしかたがなかった。この子供たちの母親になってあげることが自分の使命と思い、全財産をつぎこんで、昭和二十三（一九四八）年、このホームを作られたということだ。

五月の日射しの中で、父が話しかけてきた。

「なあ、愛。お父さんはこの間、愛のクラスの授業参観に行つて、リャンちゃんを見たとき、小さいころの自分に出会ったような気がしてね。」

「お父さんの小さいころ？」

「うん。お父さんも、ずいぶんといじめられたんだよ。ホームを一步出ると、目の色がちがうとか、かみの毛の色がちがうと言われてね。あるとき、ママちやまと電車に乗ったんだ。そしたら、

エリザベス・サンダース・ホーム
澤田美喜（さわだみき）が作った外国人の父親と日本人の母親を持つ子供（こども）のための施設（しせつ）。

澤田美喜

（一九〇二～一九八〇）



世界中から届(とど)くエアメールに返事を書く澤田美喜

父は言った。「ママちゃまは、お父さんたちを、みんな同じように愛してください。」って。それが、私の名前の秘密。

五月十二日(晴れ) 昭和五十五(一九八〇)年の今日、澤田先生がなくなられた。旅先のスペインで。そして今日、私は素直に、リヤンちゃんに声をかけた。「私のお誕生会に来てる？」って。リヤンちゃんはうれしそうだった。

ありがとう！ 澤田先生。

五月七日(雨) 今日も、リヤンちゃんに声をかけられなかった。お父さん、ごめんね。澤田先生、ごめんなさい。

五月十日(晴れ) 父のアルバムを見る。澤田先生にだかれた小さいころの父を見ていたら、なみだが出てきた。澤田先生は、三十年間に千人以上の子供たちの母親になられた。いつも、山ほどの苦勞をかかえながら。

後ろからかみの毛を引っぱられて、日本人じゃないからアメリカへ帰れって、男の人に言われた。」

今まで、一度も聞いたことのない話だった。

「そのとき、ママちゃまがね、顔を真っ赤にして、『この子たちに、どんな罪があるんです。日本人でもアメリカ人でも、どこの国の人でも、同じ人間じゃありませんか。』と、言ってくださったんだ。」

父の長いまつ毛に、光るものがあった。

「お父さんはね。社会に出てからも、苦しいときにはいつもママちゃまの言葉を思い出して、頑張ったんだ。」

思わず、父の手をにぎった。ずっとずっと父が好きになった。

大磯駅で、父が突然、私をふり返った。

「なあ、愛、愛はリヤンちゃんにやさしくしてるんだろう？」

私は、ただだまっていた。心がうずいた。



澤田美喜と子供たち